

国際融合文化学会

International Society for Harmony & Combination of Cultures

国際融合文化学会(ISHCC)第11回宮古島大会

ISHCC the 11th Domestic Convention at Miyakojima, Japan

平成 18 年 10 月 13 日～15 日 October 13-15, 2006

ISHCC 国内第十一回研究発表会 プログラム

The Paper and a Documentary Film Presentation:
“Noh Hamlet” by Kanze Performers & Mansaku NOMURA

10 月 14 日 午後 4 時 10 分～10 時 October 14, 16:10~22:00

会場： ●宮古島市中央公民館 Miyakojimashi Chuou-Kouminnkan

〒906-0013 沖縄県宮古島市平良字下里315
電話 0980-73-1123

交通： ●マティダ市民劇場、ホテルアトールから徒歩 4,5 分
ダイワドライビングスクール・大和自動車練習所近傍
From Matida Civic Theater, take a few minutes walk.
●空港よりタクシーで15分



【大会日程】 ※下記日程は都合により変更されることがあります。 敬称は略させていただきます。

時間	大会進行予定	備考
OCT.14		
15:50 ～	受付開始	受付： 聴講自由 ※会費未納会員は会費 をご納入ください。
16:10	研究発表（1）（一人15分以内、加えて5分以内の質疑応答）	
16:10 ～	長田 朱美 金井 治 平 辰彦（5分休憩）	
18:20	与那覇晶子 鈴木 雅恵 川田 基生 日埜 博司	
18:30	懇親会（会費制・会場未定）	
20:00		
20:20 ～	研究発表（2）舞台記録映画『日本語能・ハムレット』 （野村万作ほか出演）	
22:00		

【連絡先】

川田基生（事務局）： E-Mail: motoo@u01.gate.01.com、Tel: 090-7307-1328

または 上田邦義（会長）： E-Mail: ueda@gssc.nihon-u.ac.jp、Tel: 0557-82-1411 (Home+Fax)

For more information, please E-Mail to motoo@u01.gate.01.com

(Kawata) or ueda@gssc.nihon-u.ac.jp (Ueda).



研究発表 題目一覧

	発表者	題目
10月14日		
ご挨拶 16:10～	うえだくによし 上田邦義会長	過去をどう生かすか
研究発表 16:15～	おさだ あけみ 長田 朱美	後発酵茶 茯茶の官能評価に見る茶の嗜好表現 ～人はお茶の魅力をどのように表現するのか～
同上	かない おさむ 金井 治	ヘミングウェイの作品にみる臨死体験描写について
同上	たいら たつひこ 平 辰彦	宮古島・島尻の来訪神パーントゥの仮面の比較研究 —来訪神の姿とところの源流をめぐって—
同上 17:20～	よな ばしろうこ 与那覇晶子	沖縄のハムレット
同上	すずき まさえ 鈴木 雅恵	シェイクスピアとアジアの伝統—『原ハムレット』から沖縄芝居まで—
同上	かわた もとお 川田 基生	宮古歌謡の想像力 —— 律音階の楽理と美意識について ——
同上	ひの ひろし 日埜 博司	日本イエズス会版『サルヴァトル・ムンヂ』に見るキリタンへの尋問 —その特異性をめぐって—

発表要旨

上田邦義会長 御挨拶 「過去をどう生かすか」 Live in the Future, Not in the Past

氏名	タイトル
	発表要旨
長田 朱美	後発酵茶 茯茶の官能評価に見る茶の嗜好表現 ～人はお茶の魅力をどのように表現するのか～ A Study in the Contrast of Tea Flavours and Properties
	<p>1. 目的</p> <p>茶は、コーヒー、ココアとともに世界の三大飲料のひとつであり、2000年以上にわたって、人類に飲まれ続けている。気候、風土によって茶の栽培方法、製造方法が異なり、まさに世界の各地域の文化を継承する一つの材料であるといえる。そこで、本研究では、シルクロードの神秘的なお茶と呼ばれる茯茶をサンプルとした官能評価を行い、そこから人はお茶の魅力をどのように表現するのかを明らかにすることを目的とした。</p> <p>2. 方法</p> <p>官能評価にあたり、パネラーは、茶についての専門知識を有し、茯茶を飲んだことがない102人を対象とした。色、香り、味について5段階の評価を行った後、それぞれの印象について自由記述を行った。なお、評価終了後まで、後発酵茶であることは、公表しなかった。</p>
金井 治	ヘミングウェイの作品にみる臨死体験描写について Near-Death Experience Descriptions in Hemingway's Works
	<p>ヘミングウェイは、第1次世界大戦のイタリア戦線において、アメリカ赤十字の中尉として傷病兵輸送という任務をおびて従軍した。</p> <p>しかし、そこでオーストラリア軍の迫撃砲弾を浴びて瀕死の重傷を負う。そのとき、彼は生死の狭間で「魂が口の中に飛び出してきた」という、幻想的なイメージにとらわれる。この現象は、臨死体験をしたときにみられる魂の体外離脱と呼ばれるものに酷似している。そこで、ヘミングウェイの作品『武器よさらば』などの描写を通して、彼がどのような形で臨死体験をしたのか、について論証してみたい。</p>
平 辰彦	宮古島・島尻の来訪神パーントゥの仮面の比較研究
	<p>宮古島の平良市島尻でおこなわれている「パーントゥ」の祭りは、旧暦9月吉日、二日間おこなわれる。その祭りは、現在の島尻集落の北に位置する元島の海岸にクバの葉で包まれた仮面が流れてきて、これを持ち帰り、祭りが始まったといわれている。その仮面を身につける者は、現在、島尻集落の青年会によって希望者から選任され、「キャン」というつる草を全身にまとい、縄で巻きつけ、「ンマリガー」という聖地の井戸から泥をくみ出し、全身に塗りたくり、頭に「マートゥ」（すすき）をし、手には、「グジャン」（杖）と仮面をもつ。そして「ンマリガー」から「パーントゥ」は、出発し、元島を廻り、礼拝したあと、集落をめぐる、その集落の新築の家や子供が誕生した家などをめぐり、厄払いをおこなう。</p> <p>本発表では、この「パーントゥ」の祭りを、その仮面に焦点をあて東北の来訪神の祭りと比較しながら、「パーントゥ」の姿とこころの源流を探ってみたい。</p>

<p>与那覇晶子</p>	<p>沖縄のハムレット Hamlet in Okinawa</p> <p>沖縄の芸能史を紐解くと、明治12年の廃藩置県〔首里王府滅亡〕以降、日本への同化を余儀なくされた琉球・沖縄人が自らの拠って立つ歴史・風土・文化と新しい時代〔大和の文化・制度〕を融合させながら、ウチナーグチ〔沖縄語〕を用いて独自の演劇（台詞劇・歌劇）に情念を注いだ様が見て取れる。沖縄芝居は沖縄の近代化の中で形成された集団的共有性〔メディア的媒体〕をもった演劇であった。日本への同化・近代化の流れの中で川上音次郎が上演した『ハムレット』を真似て沖縄でも上演されたのが1906年の事である。</p> <p>しかし本発表は戦前のウチナーグチで上演された『ハムレット』についてではなく、遺老説伝や宮古史伝に伝承された兄弟殺しと仇討ちが、西洋ハムレットの原型に類似することに着目し、その物語構造の特徴と『ハムレット』との違いについて、またその伝承が組踊の多くの敵討ち物に連なっていくことについて言及したい。さらに戦後、沖縄芝居の隆盛を飾った元辻遊郭出身の女性たちで設立された劇団「乙姫」によって上演された『ハムレット』の翻案作品『乱菊』について紹介する。舞踊幻想歌劇の特徴をもつ『乱菊』も焦点は按司殺しとその仇討ちにあり、そこが劇的クライマックスになっている。</p>
<p>鈴木 雅恵</p>	<p>シェイクスピアとアジアの伝統 —『原ハムレット』から沖縄芝居まで— Shakespeare and the Asian Theatre Tradition:from Ur-Hamlet to Okinawan Drama</p> <p>現在日本では、従来の西欧演劇を手本とするシェイクスピア上演のほか、能、歌舞伎、狂言、ロックオペラ、子供のためのシェイクスピア劇など、多様な舞台が毎年生まれている。その中でも、『ハムレット』は明治期の最初のシェイクスピア・ブーム以来、繰り返し上演されてきた作品であり、1906年には沖縄の芝居シー達にも取り上げられている。</p> <p>そもそもアジアのシェイクスピア受容の歴史は、その地域の西欧化／近代化(沖縄の場合は大和化)の歴史と深い関わりがあるわけだが、近年では、独自の伝統様式の中にシェイクスピアを取り込もうというアジアの演出家たちの試みがある一方、日本を含むアジアの伝統演劇の中に“performativity”を求めようとする西欧の演出家が様々な異文化交流的試みやパワーポリティクスを紡ぐための題材として、特に『ハムレット』をとり上げる機会も増えてきている。</p> <p>本発表では、5年近い準備期間を経て本年8月にエルシノアのクロンボーク城で上演されたユジーニオ・バーバ演出の <i>Ur Hamlet</i>(『原ハムレット』)の分析に重点を置きながら、日本や中国などで上演されたハムレットの翻案舞台と比較し、さらに、アジアの芸術家同士の交流の地点として注目を浴びつつある沖縄での『ハムレット』上演の意義についても考えてみたい。</p>

<p>川田 基生</p>	<p>宮古歌謡の想像力 —— 律音階の楽理と美意識について —— The Poetic Sentiments in Songs of Miyakojima</p> <p>沖縄の歌謡と宮古の歌謡は異なる想像力で構成されている。喜びにあふれる沖縄歌謡、メランコリックで澄んだ宮古歌謡。これは楽理上、琉球音階と律音階の違いであろう。</p> <p>律音階の歴史は古い。黄帝の呂六・律六制定以後、中国古代音楽の楽理は日本雅楽、能楽、宮古歌謡に通底している。世阿弥は『風姿花伝』において17歳になった弟子に盤渉(ばんしき)調の修得を求めているが、雅楽「青海波」は盤渉調であり若き日の光源氏も盤渉調にのって舞ったことになる。</p> <p>唐代において中国音楽は一つのピークを迎え、空前の構成で天女の舞が制作された。玄宗自身が作曲し、楊貴妃が舞う「霓裳羽衣(げいしょううい)の曲」である。能の「羽衣」において、羽衣を返してもらった天女が舞うのは「霓裳羽衣の曲」と</p>
--------------	--

	<p>されている。 宮古市歌「黎明の空に」の歌詞「天女来たりて 水に遊ぶ」の想像力を上記のように考察したい。</p>
日埜 博司	<p>日本イエズス会版『サルヴァトル・ムンヂ』に見るキリシタンへの尋問 —その特異性をめぐって— Concerning the Jesuit Press <i>Salvator Mundi</i> (1598): A Peculiarity of Several Interrogations towards the Japanese Kirishitans as Seen Therein.</p> <p>中世カトリック世界では、モーセの十誡やカトリック七大罪に関する信徒の懺悔（告解）を聴くための尋問マニュアルがたびたび編纂された。1598年に日本イエズス会が刊行した『サルヴァトル・ムンヂ』（漢字仮名交じりの和文。ローマ・カサナテンセ文庫蔵）はその日本版というべき書物であるが、そこには、避妊・墮胎や蓄妾、神仏への祈願や種々の呪い、さらには自害の企てや様斬（ためしぎり）など、16世紀末の社会風潮を反映した日本人の“非カトリック”的な行動形態に関する尋問が見える。それらを手がかりに、戦国期日本でキリシタン倫理を説こうとした南欧人宣教師の心遣いの一端を紹介する。</p>